

## 「種を蒔く人のたとえ」

マルコによる福音書 四章一―九節

南山教会 二〇二六年二月一日

村山盛芳

今日の聖書箇所はとても有名です。「種を蒔く人」のたとえです。丁寧なことに、一三―二〇節で「種を蒔く人」のたとえも説明が述べられています。そのまま素直に読み進めれば、理解できる箇所です。自分は良い土地でありたいけれども、道端なのか、石だらけの地なのか、茨の中なのか。自分自身や、あの人はどうなのか、そう考えさせられる箇所でもあります。また、「福音の種を蒔く時、あるものは芽を出さず、他のものは芽を出すが成長しない。しかし必ず豊かな実りをもたらす種もあるから、くじけないで蒔き続けなさい」というふうに教えられてきました。でも、それだけなのでしょう。1  
うか。違う角度から今日の話をとらえてみたいのです。

マルコによる福音書の四章には、イエスが語られた三つの「種のたとえ」が記されています。最初は「種を蒔く人のたとえ」（一―二〇節）、二番目が「成長する種のたとえ」（二六―二九節）、三番目が「からし種のたとえ」（三〇―三二節）です。

パレスチナでは一月から一二月にかけて、大麦や小麦の種を蒔きます。日本では最初に畑を耕し、畝を造って、そこに種を蒔きますが、パレスチナでは最初に手で畑一杯に種をまき、その後で耕して種に土をかぶせるのが一般的だったそうです。手で蒔きますから、種はいろいろな所に落ちます。たとえ話の最初の三つの種はいずれも実を結ぶことは出来ませんでした。

しかし「良い地に蒔かれた種は豊かな実を結ぶ」とイエスは語られます（八節）。最初の種は種のままに終わり、第二の種は芽を出して終わり、第三の種は育ちますが実をつけずに終わります。この

ような農法は私たちから見ると大雑把すぎるような気がします。農夫は気にしませんが、種を蒔く人は長年の経験から蒔いた種に多少の損失があっても、良い種は芽を出し、成長し、豊かに実をつけることを知っているからです。ここで注目すべきは、最初の三つの種はいずれも単数形で書かれ、最後の「良い地に蒔かれた種」だけが複数形になっていることです。ですから、失われていく種（単数形）があっても平気であり、むしろ種（複数形）を蒔く時に豊かな収穫を予期しながら、希望に満ちて種を蒔くとイエスは語られています。

最近の聖書学の研究では、マルコ四章一三節から二〇節はイエス後の教会が解釈したものがここに挿入されていると教えます。一五節を見ますと、譬えの解説があります。「道端のものは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る」。「御言葉」（ホ・ロゴス）というのは初代教会特有の言葉で、イエスは用いられていませんでした。また文体も一〇九節と大きく異なっていると言われています。「御言葉が蒔かれても」、イエス後の教会が宣教に励んでも、それを受け入れる人が少なかった伝道の困難がここに表明されているようです。「御言葉が蒔かれる」、「御言葉につまずく」、「御言葉のために迫害が起こる」、当時の教会は一生懸命に伝道しましたが、実りの少なかった厳しさが反映されています。初代の教会の人々は、イエスが語られた「種まきの譬え」を、伝道に行き詰まっている自分たちの教会に語られた言葉として聞き、「必ず御言葉を聞いて受け入れる人が出てくるから、たゆまず伝道しなさい」と聞きました。それが一三〇節の部分なのです。この部分は、初代教会がどのように苦労して伝道していったかを知る上で貴重な証言であり、現実的な受け止め方です。しかし、イエスが語られたのはそういう意味ではなかったと思えます。

二六―二七節に次のような言葉があります。「また、イエスは言われた『神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうして

そうなるのか、その人は知らない』」。イエスは「種蒔きのたとえ」を話されました。その中で「種を蒔く人は長年の経験から蒔いた種に多少の損失があっても、良い種は芽を出し、成長し、豊かな実をつけることを知っている。だから多少失われていく種があっても平気であり、むしろ将来の豊かな収穫を予期しながら、希望に満ちて種を蒔く」と語られました。その希望の根拠がこの二番目、三番目の譬えの中にあるような気がします。蒔かれた種は神の種であり、種そのものに命があるゆえに、種はその力で成長していくのです。

この秘密を最もよく実感する者は種を蒔く農夫でしょう。農夫が種を蒔く時、彼はその種がどのようにして成長するのかはしりません。しかし、長年の経験で、種が蒔かれ、土がかぶせられ、雨が降り、太陽が射すうちに、種は発芽し、茎が伸び、穂が出て、やがて豊かな実をつけることは知っています。イエスは言われます「土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである」(二八―二九<sup>3</sup>節)。「良い地に蒔かれた種は多くの実をつける、それは種に命があるからだ」、これこそがイエスが種蒔きのたとえで言われたかったことではないでしょうか。

イエスは続けられます。それが三番目のからし種の譬えです。イエスは言われます「神の国を何に譬えようか。どのような譬えで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔く時には、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作るほど大きな枝を張る」(三〇―三二節)。からし種は大きさ一ミリに満たない、種の中で最も小さいものです。文字通り「ケシ粒」のような種です。その最も小さい種でさえ、蒔いて成長すると三メートルほどの大きさになります。

イエスは「神の国は来た」と繰り返し言われましたが、誰もそれを認めようとしません。種が小さすぎて目に入らないからです。今、イエスの目の前には、かつては漁師や徴税人だった少数の弟子たち

しかいけません。エルサレムの宗教当局者はイエスを律法の違反者として追跡し、捕らえて裁判にかけようとしています。そのような人物が、「神の国は来た。私が神の指で悪霊を追い出しているのであれば、誰も信じようとしないうでしよう。イエスの伝道の業は芥子種のように、あるかないかすらわからないほどの存在でした。それはイエスが生きておられた時には実を結びませんでした。しかしイエスは、それが神の種であればいつかは発芽し、成長し、多くの収穫を結ぶと信じておられました。その確信をイエスは三つの種の譬えで話されたのです。イエスが十字架で死なれた時、誰もそれがやがては世の中を変えるような出来事だとは思いませんでした。しかし、イエスの十字架から、多くの芽が発芽し、それはやがてローマ帝国を覆い、全世界を覆うほどの大木になって行きました。

種蒔く人の譬えは、人々の拒絶を前にしても怯むことなく、神への信頼に基づく希望の中に生きられたイエスの姿を伝えています。私たちはそのイエスから霊を受け、神の子とされ、既に神の国、神の支配の中に生きている存在です。世はまるで神などいないような現実を示しています。誰もが自分勝手であり、「隣人を愛しなさい」という言葉が空虚に響くような世界を生きています。不条理に満ち満ちています。その中で小さな教会を形成し、そこに何人かの人が集まっていたとしても、その教会の中に神の国が来ているとは信じないでしょう。しかし私たちは神の種をいただいている者たちの共同体です。いただいているものが神の種である以上、必ず発芽し、成長し、多くの実を結ぶようになります。この世がたとえ「神なき世界」のように見えても、この世界を支配しておられるのは神であることを信じて、その希望の中で私たちは生き、教会を形成しています。イエスの「種のたとえ」は、その私たちを励ますために語られているのです。この希望に私たちは生かされているのです。